

# 明治期における神奈川県足柄上郡寄村弥勒寺区共有林野の利用形態

大崎 晃

## 目次

- 一 序
- 二 弥勒寺村の概観
- 三 新梨子山共有林の利用形態
- 四 杉の沢共有林の利用形態
- 五 五部落山共有林の利用形態
- 六 貉沢共有林の利用形態
- 七 結語

## 一 序

明治五年、大蔵省は地所永代売買解禁によって地券渡方規則を公布し、民有・村持・数カ村持共有林野に対する地券の交付は、買得・高請のあった林野を対象になされた。しかし、明治七年の土地官民有区分をきめた太政官布告以後の共有林野は、「一村持・某々数人持等積年慣行存在致シ比隣郡村ニ於テモ其所ニ限り進退致来候ニ無相違旨保証」する書類があれば認められることになった（地租改正事務局乙三

号達、明治八年六月二十二日）。これはさらに「口碑ト雖トモ樹木草芽等村ニテ自由ニシ何村持ト唱来リシコトヲ比隣郡村ニ於テモ瞭知シ遺証ニ代ッテ保証スル」ことができる場合（地租改正事務局乙十一号達、明治八年十二月二十四日）にも拡大された。この具体的内容については「樹木植付或ハ焼払等其村所有地ノ如ク進退シ」「天生ノ草木ヲ伐刈シ」「旧来入会村外ノ者ヨリ公然山手野手等ノ名ヲ以テ多少ノ米錢ヲ収メ」たりして、村民共同による「勝手進退」の実績を求めている。<sup>(1)</sup>

制度的にみた共有林野の形成過程は一般に以上のとおりであるが、この点は今回研究の対象とした神奈川県足柄上郡寄村（現松田町）では、「御公儀様御林無御座候」「山錢永三百四拾文上納仕候」「草蒨場当村山又ハ入会山ニ而蒨来リ申候」<sup>(2)</sup>とか、「山々ノ儀ハ東北ノ方横山石荒窪と唱場所当村持山ニテ老年勝手ニ蒨来申候 右場所他村々ニテ入会仕候村々左ノ通 柳川村 八沢村 菖蒲村 外当村より他村ニ入会仕候場所 宇津茂村 大寺村 弥勒寺村 山手役永貳百拾五

文当時小田原へ相納申候<sup>(3)</sup>」と記録に残されている。しかし村持など共有林野の「勝手進退」の内容はどのようなものであったか、また利用状態や村落経済との関係および明治期以後の変容過程などについてはかならずしも詳らかではない。今回はこの点について史料整理の作業を通じて、明治期における寄村弥勒寺地区（明治八年の大区小区制による合併以前には単独で一村を形成していた）の状態の一部を復元し、今後の研究を進める資にしようと試みた。

(1) 島田錦蔵『森林組合論』岩波書店 昭和十六年 四二三―四二五頁。

古島敏雄編『日本林野制度の研究』東大出版会 昭和三〇年 四七―

五六頁。

近藤康男編『牧野の研究』東大出版会 昭和三四年 一七八―一七九

頁。

(2) 「相模国足柄上郡宇津茂村鑑帳下書 文政六末年」（飯田弥十郎氏蔵）。

(3) 「地誌御調書上帳 相模国足柄上郡大井庄土佐原村 天保五甲午年八月」（飯田弥十郎氏蔵）。

## 二 旧弥勒寺村の概観

近世の弥勒寺村の状態については、数度の火災を受けて記録がほとんど残っていないために俄かには詳かにしえない。目下のところは、二宮尊徳が弥勒寺村徳平なる農民に試みた負債償還仕法の記録などによって、当時の経済生活をわずかに推測することができるのみである。徳平は、弥勒寺村では相当の富農であったようであり、天保十四年の

収入は、「分内暮し方取調帳<sup>(1)</sup>」によると、上木売払代金拾七兩貳朱錢五百七拾貳文、小作預ヶ分作徳三拾三兩貳歩錢三百五拾四文、手作分は米拾四俵貳斗三升五合、大麦拾三俵壹斗三升、芋五拾貳俵、大豆八俵五升、粟七俵四斗、菜種四俵壹斗四升、他に裸麦・小麦・豌豆・紅花・餅栗・稗・蕎麦・黒大豆・小豆などが若干あった。この他に農外収入もかなりあつて、炭・屋根板・桶などを小田原・渋沢・伊勢原・吉田島・塩海へ出荷し、帰り荷として米・酒・塩などを搬入する際の駄賃稼ぎを行なっていたようである。

近世の事情を明らかにする手がかりとなる村鑑の類は弥勒寺村のものはいまだ発見されていないが、同村ときわめて類似した環境にある隣村（厳密には隣の隣であるが）の旧宇津茂村の村鑑によって、さらに当地の当時における経済生活の推測を加えよう。まず田畑は、火山灰の推積による「深砂地ニ罷成十日も照続き候ハバ早損仕候<sup>(2)</sup>」といった早魃になやむところであった。これは宝永四年の富士山噴火による降灰によって「砂地ニ罷成」、さらに洪水で下流へ流された火山灰が川筋の新田を「石砂入<sup>(3)</sup>」る「川成」とし、「三ヶ年用捨」する耕作不能の「川欠」の地としたのであった。こうした耕地の低生産性を補うものとして山稼ぎがある。「男女渡世之儀耕作之間男ハ入会山ニ而薪刈取道中筋梅沢塩海迄五里余之所へ持出し少々之錢ニ代替渡世之足<sup>(4)</sup>」にし、「藍薪草刈来り申候反歩之義入会山故定り無御座<sup>(4)</sup>」というものであった。肥料としての蒟敷は当時の生産性の低い農法や、やせた土地にとつては欠かすことのできないものであり、「その量は一反当たり三百貫か

ら五百貫もの大量に及び、それだけの刈敷を得るための採草地面積は「それを入れる田畑の面積よりもよほど<sup>(5)</sup>」いものが必要であった。また山は、薪炭・刈敷の他にも萱・秣・漆の採取、猪をはじめとする野生動物の狩猟にも利用されていたことが、村に「猟師鉄砲四挺」<sup>(6)</sup>があって、「是ハ当村山方ニ御座候得ハ猪鹿猿多出候ニ付先規御地頭様より所持仕猟師ニ而渡世送り申候」と記録にあるので知られる。しかし何といつても当時この地で重要だったのは木炭で、江戸へ「凡四万俵程追々ニ差送り候得尤」「安仕切候」「之就而者前金相渡候」とあって、問屋支配下におかれていたことを推測させる。

(1) 二宮尊徳偉業宣揚会編『二宮尊徳全集』第十八巻 同会 昭和四年  
四七二—四七六頁。

(2) 「相模国足柄上郡宇津茂村鑑帳下書 文政六未年」(飯田弥十郎氏蔵)。

(3) 「未年御物成可納割付之事 安政六未年 宇津茂村」(大館勝治氏蔵)。

(4) 前掲(2)。

(5) 福田以久生編『まつだの歴史』松田町教育委員会 昭和五二年 一二七頁。

(6) 前掲(2)。

(7) 「乍恐以返答奉申上候 安政五年」(大館秀夫氏蔵)。

### 三 新梨子山共有林の利用形態

新梨子山は稲郷岳から中津川までの面積七十町余の山林で、旧弥勒寺村十六戸による記名共有林である(昭和四年の記録<sup>(1)</sup>では新戸——分

家——三戸が加わり十九戸になっている)。新梨子山の利用は、記名者による自給用の刈敷・秣の採草および薪の採取以外には三つの部分にわかれる。

まず一番低い場所にある平坦地新井沢畑は、地目は山林ながら永久畑として大豆・甘藷・粟・里芋などを作る開墾地である。耕作者は小作料(年貢と呼ばれた)の納入が必要で、記録には記名共有者以外の名も見える。

寛<sup>(2)</sup>

明治廿三年寅十二月卅日

新以畑年貢

一金参円拾貳銭五厘

宇津茂

米吉

受取

同

一金参円拾四銭

土佐原

為五郎

辰五郎

受取

一方山林としての利用では、明治・大正期には櫨・櫟など木炭原木を採取し、原木は村内外の炭焼を営むもの、あるいはこれを転売する

仲買人に売却された。原木代金は再植林経費、すなわち苗木代と植林作業出役者の酒肴・菓子代を差引き、残金は共有記名者の財産となった。また一採取期に十二・三年を要する檜・櫟に対して成長期が八年ですむ榛を植え、採取後の四・五年を一時畑地として利用する切替畑もあった。これが第三の利用形態である。

しかし開墾畑の年貢と木炭原木の売却代金の大部分は、後述する貸付金の利子とともに年々部内に累積されて共有記名社中へ納税金や営農資金として貸付けられ貴重な金融機関として機能したが植林による再生産といった近代的林業は明治期にはまだ行なわれなかった。利子率は年率一割二分と記録<sup>(3)</sup>されている。社中の借入希望者は当時のきびしい社会情勢を反映してか年々増加し、後述する明治末期の五部落山の森村市左衛門への売却へとつながっていったと思われる。この間の経過を示す資料を次に掲げよう。

(4) 寛

(明治十八年) 酉年より寅年迄六ヶ年分

惣ノ金拾参円

(貸付金) あらため

一金拾参円也

新なし杉山代金

明治廿三年寅年受取

二口ノ金貳拾六円也

(明治二十四年) 卯年分十二月十五日 (利足)

一金拾貳錢五厘

飯田 与左衛門

一金拾貳錢五厘

小宮新治郎

一金参拾錢

飯田吉五郎

一金拾六錢

飯田熊次郎

一金壹円拾八錢

小宮喜太郎

一金四拾錢

飯田捨五郎

一金貳拾七錢

井上菊治郎

一金九拾錢

新なし山代

飯田熊次郎

一金九拾錢

桐生藤吉

一金六拾錢

新以山林

飯田定兵衛

一金貳円貳拾錢

(年貢)

土佐原吉

一金参円拾参錢五厘

宇津茂

米吉

卯年之分

ノ金拾円拾八錢五厘

此内拾八錢

酒代ひき

惣ノ参拾六円

明治廿四年卯十二月十五日

一金五円

かし

飯田定兵衛

一金貳円五拾錢

かし

桐生為吉

一金貳円五拾錢

かし

小宮健次郎

卯正月より未年五ヶ年十二月十四日

一金貳円也

ないぎ代

一金貳拾錢 同

(5) 覚

(明治廿六年) 巳正月四日

一金貳拾五円

山林売之代

二月卅日

一、四千本

くのぎ代

此代拾貳円八拾老錢

一金老円四拾八錢五厘

はんのきないぎ

一金八拾九錢

酒さかな代

べ金拾五円拾八錢五厘

明治廿六年分之利足

一金老円

一金八拾九錢四厘

一金参拾錢

一金五拾錢

一金拾貳錢五厘

一金五拾錢

一金四拾錢

一金四拾八錢

一金参拾五錢五厘

一金拾六錢

小宮喜太郎  
小宮健次郎  
飯田吉五郎  
飯田定兵衛

飯田与左衛門

小宮新治郎

桐生藤吉

飯田捨五郎

井上菊治郎

飯田熊治郎

一金参円拾貳錢五厘 宇津茂 米 五 郎

明治廿六年二月十八日(貸金)あらため

一金拾円也

かし

一金拾老円也

かし

一金六円也

一金七円也

一金参円也

一金五円也

一金五円也

一金老円貳拾錢也

一金四円也

一金五円也

一金参円也

一金参円七拾錢也

飯田辰五郎  
中津川 国五郎  
飯田定兵衛

明治卅一年度新以年貢

一金参円拾錢

一金六円

同年利(足)金

一金拾老円六拾九錢五厘

年租利子山代金

宇津茂米吉より請取  
山代金 桐生藤吉より請取

ノ金貳拾円七拾九錢五厘

明治卅一年度諸入費

一金七拾錢

酒代

一金四拾貳錢

魚代

一金四錢

紙代

一金貳拾壹錢五厘

油代

一金拾貳錢

肴代

入費ノ金壹円五拾錢

差引金拾九円貳拾九錢五厘

明治卅一年十一月(貸金)改め

一金拾五円

一金拾參円五拾錢

一金拾參円

一金拾円

一金參拾円

一金拾円

一金五円

一金五円

一金四円

一金參円七拾錢

一金六円

一金五円

一金五円

小宮健治郎

中津川 国五郎

飯田吉五郎

飯田熊治郎

小宮喜太郎

飯田定兵衛

井上菊次郎

小宮彦五郎

飯田捨五郎

飯田辰五郎

飯田平次郎

飯田玉五郎

一金拾參円

小宮新次郎

合計金百參拾參円貳拾錢

明治卅一年十二月廿五日貸付右之通り

明治末期からは杉などをはじめとする造林事業が開始されて、後述するように下蒔りには各戸一人の出役が義務づけられ欠勤者からは出役不足金が徴収された。新梨子山における最初の不足金の記録は大正三年に見えている。林業経営が軌道にのり出した昭和初期からは、山林売却による利益は共有記名者に均等に配当されてくり越金はほとんど残しておらず、財産区としての新梨子山はその性格を変えていった。まとまった利益金の配当は昭和二年からである(第一表)。

昭和二年十二月卅日新梨山代及年貢配当<sup>(8)</sup>

内訳

一金參拾六円

大正八年ヨリ昭和二年十二月ニ至ル九年間年貢

一金貳百八拾円

山代金八百円の内金

計金參百拾六円

内

一金壹円八拾錢

電柱地代払ヒ

一金貳拾四円四拾錢

大正八年ヨリ同期間中の雜費

ノ金貳拾六円貳拾錢

引去残金貳百八拾九円八拾銭  
同年十二月卅日雜費

一金參円

一金壹円八拾銭

メ金四円八拾銭

人員十九名

一人当り配当金拾五円宛

残金ナシ

酒代

砂糖醬油

念為扣置件

一人 小宮喜太郎  
一人 小宮関太郎  
三人 小宮太郎吉  
三人 飯田靖

昭和十四年一月十七日(配当)<sup>(10)</sup>

金參拾九銭 昭和十三年十一月卅日預り

金參百拾円

山代 佐藤国太郎

金貳拾円

山見ノ時費用酒カシ

合計參百參拾円參拾九銭

金七円

山見ノ時費用酒カシ

差引金十六人割

一人当り貳拾円貳拾銭

(昭和三年)新梨山代(配当)<sup>(9)</sup>

惣金八百円

雜費差引一人ニ付

金四拾參円ツツ

(下剋)人夫出不足差引事

一日壹円五拾銭で

二人 飯田弥三郎  
一人 飯田賢三  
一人 熊沢綱吉

(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)「新梨子山林 明治十八年西  
五月五日起」綴(飯田弥十郎氏蔵)。

第一表 新梨子山林經營収支一覽

年 代	新井畑年貢	山林代金	貸金利子	年間収入	苗木代	出役等入費	配当金	年間支出	年間収支	差引残高	貸付金
明治十六年	一・五 円	円	円	一・五 円	0・0 円	円	円	0・0 円	一・五 円	一・五 円	0・0 円

年 代	新井畑年貢	山林代金	貸金利子	年間収入	苗木代	出役等入費	配当金	年間支出	年間収支	差引残高	貸付金
明治十九年	一・二五		〇・一一	一・六六		〇・二七		〇・二七	一・六六	三・八一	一・二五
二〇	一・二五	一・四〇	〇・一七	一・四二					一・五五	三・六六	一・二五
二一	四・五五	一・四〇	〇・四七	六・三三					六・三三	二・一六	二・三三
二二	一・四〇		一・四三	二・八二	一・一四			一・一四	二・三三	三・九三	不明
二三	四・六六	三・〇〇	二・五五	七・二一	二・二〇	〇・六六		二・六六	七・二七	三・九三	三・五〇
二四	三・三三	三・四〇	四・〇三	三・四〇		〇・五五		〇・五五	二・九一	四・二七	三・五〇
二五	三・三三	三・〇〇	七・八元	三・九元	一・四二・五五	〇・九元		一・五二・六五	三・七四	六・八四	三・五〇
二六	三・三三	七・〇〇	不明	六・一六		〇・三三		〇・三三	五・八六	六・八四	〇・六六
二七	不明		八・八五	二・三〇		二・四		二・四	八・八六	六・七三	不明
二八	三・三五			不明		一・九一		不明	二・五五	二・七三	三・五〇
二九		六・〇〇	二・六五	三・六五		一・五		一・五	二・九五	一・八五	二・三〇
三〇	三・一〇			不明	一・五			不明	不明	不明	不明
三一		五・〇〇		不明		三・一〇		三・一〇	不明	不明	不明
三二		五・〇〇		三・五五	一・五	四・九		六・四	三・九元	不明	二・〇六
三三		三・〇〇	三・六六	三・五五		一・三三		一・三三	三・四六	不明	二・三六
三四		三・〇〇	二・六六	四・六六		一・六六		一・六六	三・四六	不明	三・三六
三五		三・〇〇	三・三三	三・三三	五・〇〇	二・九元		七・〇元	三・三三	不明	不明
三六		三・〇〇	二・〇〇	三・三三	三・〇〇	三・九元		六・四	三・三三	不明	不明
三七		三・〇〇		三・三三		三・九元		六・四	三・三三	不明	不明
三八		三・〇〇	二・六六	三・三三		三・九元		六・四	三・三三	不明	不明
三九		三・〇〇	二・六六	三・三三		三・九元		六・四	三・三三	不明	不明
四〇		三・〇〇	二・六六	三・三三		三・九元		六・四	三・三三	不明	不明
昭和二	三・〇〇	三・〇〇		三・〇〇		三・〇〇	三・五・〇〇	三・五・〇〇	〇	〇・一六	
三		三・〇〇		三・〇〇		三・〇〇	三・五・〇〇	三・五・〇〇	〇	〇・一六	
四		三・〇〇		三・〇〇		三・〇〇	三・五・〇〇	三・五・〇〇	〇	〇・一六	

「新梨子山林 明治十八年西五月五日起」綴より作成



#### 四 杉の沢共有林の利用形態

杉の沢山は中津川の支流、杉の沢沿いの斜面四〇〇町歩にわたる旧弥勒寺村の共有地である。杉の沢山の入口近くに畑地として利用されていた桃木通りと呼ばれる蒔畑があり、大豆・小豆・粟・里芋などが作られていた。蒔畑は地方によっては山作・薙畑・切替畑とも呼ばれ本来は焼畑のほずであるが、ここでは耕作者から徴収する小作料（年貢）に畑地同様の等級があつて一畝当たり上畑四錢、中畑三錢、下畑二錢であつた。小作料の等級化のためには耕作地が固定されていなければならぬが、焼畑が「年々一つ処に作付難成当年仕付たる処来年は萱草等生次第に致置外の所」であれば、このことは不可能である。したがつて桃木通りはかつては焼畑地だったかも知れないが、この時期には永久畑になつていたものと考えられる。少し長文になるが次に資料を引用してみよう。

桃木<sup>ママ</sup>だうり大蒔畑之口新蒔畑銘之記<sup>(2)</sup>

中ホ

一反別老反老畝拾歩

此貢金參拾四錢

上ホ

一反別七畝貳拾八歩

此貢金參拾老錢七厘

中津川小平

桐生万太郎

下ホ

一反別六畝貳拾歩

此貢金拾參錢參厘

下ホ

一反別九畝四歩

此貢金拾八錢三厘

中ホ

一反別九畝貳拾四歩

此貢金貳拾九錢四厘

中ホ

一反別貳反八歩

此貢金六拾錢八厘

中ホ

一反別老反貳畝貳拾六歩

此貢金參拾八錢六厘

上ホ

一反別老反四畝貳拾歩

此貢金五拾九錢五厘

中ホ

一反別老反六畝拾八歩

此貢金四拾九錢八厘

中ホ

飯田長兵衛

年貢 兵左衛門出

佐藤新太郎

同 兵左衛門出

飯田小平治

同 兵左衛門出

熊沢要吉

同 兵左衛門出

飯田要助

同 兵左衛門出

岡部好五郎

岡部好五郎

岡部好五郎

川口熊次郎

中津川才治

川口熊太郎

川口安太郎

井沢作藏

井沢半兵衛

松本彰吉

石井米吉

小宮豊次郎

岡部源六

岡部乙吉

岡部福松

松本辰五郎

小宮権次郎

松本ヨウ

岡部好五郎

小宮酒造藏

一反別九畝八歩

此貢金參拾八錢四厘

中ホ

一反別四畝六歩

此貢金拾貳錢六厘

中ホ

一反別六畝貳拾歩

此貢金拾七錢

中ホ

一反別六畝歩

此貢金拾八錢

上ホ

一反別壹反貳拾壹歩

此貢金四拾貳錢八厘

下ホ

一反別八畝七歩

此貢金拾六錢五厘

中ホ

一反別壹反九畝七歩

此貢金五拾七錢七厘

中ホ

一反別壹反五畝六歩

一反別九畝五歩

此貢金貳拾七錢五厘

中ホ

一反別五畝歩

此貢金拾五錢

下ホ

一反別壹反歩

此貢金貳拾錢

上ホ

一反別七畝拾八歩

此貢金參拾錢四厘

下ホ

一反別壹反貳畝拾歩

此貢金貳拾四錢七厘

上ホ

一反別九畝三歩

此貢金參拾六錢四厘

中ホ

一反別壹反六畝貳拾四歩

此貢金五拾錢貳厘

上ホ

此貢金四拾五錢六厘

下ホ

一反別九畝拾七步

此貢金拾九錢壹厘

下ホ

一反別七畝步

此貢金拾四錢

中ホ

一反別壹反五畝步

此貢金四拾五錢

下ホ

一反別貳反步

此貢金

拾錢  
拾錢  
貳拾錢

井沢半兵衛

松本寅吉

土佐原

上ホ

一反別壹反貳畝步

此貢金四拾八錢

惣代金九円五拾四錢參厘

外ニ

一金參円五拾錢

大薊畑

宇津

茂出

惣計金拾參円四錢參厘

杉の沢山の利用は薊畑耕作の他に、山之神道りの木炭原木がある。これは入札によって売却されたが金額的に多額ではなく、経済的価値が高まるのはやはり後年の造林事業開始後である。

(3) 記

入山 山神社木投票

明治廿三年九月取極メ

一金貳拾円六拾五錢五厘

松本彦五郎へ落札ニ相成

明治廿三年九月卅一日

内金貳円也

内金受取

明治廿四年四月十三日

内金貳円也

内金受取

殘金ハ廿三年十二月廿日限り皆納之事

明治期の杉の沢山は、山林としてよりも畑地としての小作料(年貢)で旧弥勒寺村に利益をもたらした(第二表)。毎年の利益金は新梨子山と同じくもっぱら年一割の利子率で貸付金にまわされ、共同の起業資金とはならなかった。

(4) 覚

明治卅一年十二月廿九日

一金拾參円四錢參厘

薊畑年貢

一金四拾壹兩六拾六錢叁厘

アリ

此利(足)金四兩拾六錢六厘

一金貳圓六拾六錢五厘

山神社木代金

此又金拾九兩八拾七錢四厘

一金壹圓參拾七錢四厘

勘定入金

差引殘金拾八兩五拾錢

貸付トナル

一金四兩五拾錢

大館藤治郎

一金五円

中津川 勇次郎

一金七円

小宮 弥重

一金貳円

熊沢竹次郎

貸付

✓金拾八兩五拾錢

差引残金ナシ

① 島田錦蔵『森林組合論』岩波書店 昭和十六年 三三六頁。

(2)(3)(4)「入山杉の沢大茹畑山之神道木代帳 明治廿三年起」綴(飯田弥十郎氏蔵)。

第二表  
杉の沢山林経営収支一覽

[illegible]

「入山杉の沢大苧畑山之神道木代帳 明治廿三年起」綴より作成

## 五 五部落山共有林の利用形態

稲郷川の上流右岸一帯に、公称三百九十三町歩（実測五百町歩ともいわれる）の通称五部落山がある。これはかつて弥勒寺・中山・宇津茂・土佐原・稲郷・大寺・萱沼の旧村による共有地であった。利用方法は山を十区画に分割して、木炭原木の採取を希望する者を募り、希望者が重複した場合には入札を行なった。明治四十二年の入札状況は第三表のとおりであった。旧弥勒寺村を含む共有者が得た同年の山代金は三百十一円五十五銭であったが、落札者から半金を受取って次のように配分した（これには萱沼分が落ちており、あとの半金で処理したとも推測されるが実状は不明である）。

明治四十二年十一月十五日（入札金割当）<sup>(1)</sup>

金百七拾八円八拾七銭五厘

内

一割当金百七拾七円六拾銭

但シ一戸ニ付金壹円貳拾銭宛

一金六拾円 弥勒寺 五十戸

一金貳拾四円 中山 二十戸

一金拾九円貳拾銭 土佐原 十六戸

一金貳拾七円六拾銭 宇津茂 二十三戸

一金六円 稲郷 五戸

一金四拾円八拾銭 大寺 三十四戸

引ノ金壹円貳拾七銭五厘 残

われる。村では滞納税整理のための信用組合を作り、その財源は五部落山を処分してあてることとした。明治四十四年、五部落山は二万五千五百五十円で東京の森村市左衛門に売却された。<sup>(2)</sup> 森村組は明治二十六年林業部を設けて山梨県富士川流域に千町歩を購入して造林事業に乗り出していたが、購入した五部落山も大正初期に造林した。<sup>(3)</sup> 一方五部落山共有権者百八十九人には、一人当たり百余円が配当された。

(1) 「五部落入札金記入帳 明治四拾貳年貳月壹日起」綴（飯田弥十郎氏蔵）。

(2) 「土地売買契約証書 明治四拾貳年貳月貳拾貳日」綴（飯田弥十郎氏蔵）。

(3) 神奈川県農政部長務課「神奈川県林業史」同課 昭和五二年 三二頁。

明治期の寄村はきびしい社会情勢の中で、課税に苦しめられたとい

第三表 明治四十二年五部落山山林入札結果一覧

太字は落札価格

入札者	入札区画	一 号	二 号	三 号	四 号	五 号	六 号	七 号	八 号	九 号	一〇 号
(中) 橋本 茂吉 七名中		二六・〇〇 円	二五 円	二五・〇〇 円	三〇・一〇 円	三〇 円	三〇・一〇 円	七二・一〇 円	一〇・一〇 円	三三 円	五三・〇〇 円
佐藤 宇一		三三・〇〇	八五	四九・〇〇	一九・九〇	一五・〇〇	一四・五〇	七五・五〇	八・五〇	一五	五三・〇〇
大館 嘉吉		三三・〇〇	三〇	五〇・〇〇	六〇	一〇・〇〇	一九・〇〇	一五・〇〇	二〇	六二	五三・〇〇
佐藤 猶次郎		三〇・一〇	六〇	六〇・〇〇	三三・五〇	五〇・〇〇	一八・〇〇	三三・〇〇	七〇	三三	五三・〇〇
(土佐原) 連 中		三三・五〇	一五	五三・〇〇	五七	一三・〇〇	四・六〇	五三・〇〇	三〇	三二	五三・〇〇
佐藤 竹治郎		三三・一〇	九〇	五三・五〇	二七・五〇	一五・〇〇	三三・一〇	六五・一〇	九・五	九〇	五三・五〇

旧弥勒寺村の入口近くの東方にある猪沢は、旧弥勒寺村内の二十六人による記名共有林で、面積三町歩ながらも杉の造林がかなり早くから行なわれている。最初の造林の時期は不明であるが、明治四十二年の記録にはすでにみえている。<sup>1)</sup>造林後は四十年以上たてば伐採できるが、記録では大正七年・昭和三年・同五年・同十二年・同十三年に伐

「五部落入札金記入帳　明治四拾貳年式月壹日起」綴より作成採し、益金は各戸均等に配当している。造林にともなる諸作業、すなわち掃除（地明け）・植付け・夏の下蒔り・冬の枝蒔りには、共有記名者各戸一名の出役が義務づけられ、欠勤の場合には「出不足費用」として労役相当額の金銭を納入しなければならない。その金額は一日（人）当たり明治四十二年には四十銭、昭和二年には五十銭、同七年には七十銭、同十二年には一円二十銭であった。

記名共有者は新梨子山のように旧弥勒寺村の固定された世帯で、他

ママ  
正油之代  
(入費)

酒代

九 軍吉辰清端菊勝計富喜閔德安成万長三平  
次五五次 五 太太二太二 之  
郎郎郎郎 造郎平造郎郎郎郎郎吉助八

残金参円五銭 飯田府治五郎様ニ預ケ

貉沢は造林が早かったため弥勒寺村関係の共有林の中では最大の配当を共有権者にもたらしており、特に昭和期にはこの点が顕著である(第四表)。それだけに不足金の徴収や他出者の共有資格に関する規定が厳重であったと思われる。前に示した大正七年の配当金に関する記録中の秋次郎と太郎吉・又五郎の五円は不足分の、喜久造の三円と藤五郎の二円は他出の、それぞれ控除を示すものであると思われる。

金五円  
金参円  
金五円  
金貳円

章平 府治五郎 金助 国五郎 為五郎 秋次郎 喜久造 太郎吉 又五郎 藤五郎

第四表 貉沢山林経営収支一覽

年代	出不足金	山林代金	貸金利子	補助金	年間収入	苗木代	経費	配当金	年間支出	年間収支	貸付金
明治四二年 四三	四・〇〇 二・〇〇	円	円	六・〇〇 円	四・〇〇 八・〇〇	七・〇〇 三・〇〇	二・七 二・六	円	一〇・〇七 五・八二	△六・〇七 二・一八	円
大正七 七	九・〇〇	三六・五〇			三七・五〇		八・二〇	一七・〇〇	三〇・五・一〇	三・三〇	叁・元
昭和三 三	四・九〇		八・四〇			四・二五		三〇・〇〇			二・五
五	一三・一〇	五五・七〇	二・〇八		五〇・六		四・〇〇	五〇・〇〇	五四・〇〇	五・八	二・五
三						五・〇〇	一・四〇	七・四〇			一〇・〇〇
三		一一三・〇〇	二・一六		一二五・六	五・六	五・八〇	一〇六・三	一二三・元	二・八	一〇・〇〇

「貉沢共有杉植付帳 明治四十二年四月起」綴より作成

(1)(2)(3) 「貉沢共有杉植付帳 明治四十二年四月起」綴 (飯田弥十郎氏蔵)。



## 七 結 語

明治期における共有林野の利用状態は、今回はふれることができなかったがいぜんとして自給用荻藪・秣の採草地としての意義が大きかったことは、「厩肥百拾貫目及ヒ生草九拾貫目ヲ一反ノ田ニ施ス（相模国足柄郡）<sup>(1)</sup>」などの指摘とともにまず確認されてよいだろう。では他にはどんな意味があったのだろうか。この点についてはこれまでみてきたように杉などの有用材を対象とした林業経営はようやく明治末期に始まるので、それまでは木炭原木採取と荻畑利用であったと指摘できよう。そしてこれらが現金収入や耕地面積の不足を直接補ってきたことは重要な問題であり今後検討の予定であるが、今回はここから得られた山代金・小作料といった貨幣化された収益が当時の旧弥勒寺村に対して持っていた意味について、一つの問題点を指摘してこの小論を終りたいと思う。

村持（杉の沢）であれ記名共有（新梨子山）であれ当時の旧弥勒寺村の非自給的共有林利用は、林業投資というよりも地代と利子を内部に蓄積していく地主資本的性格であった。そして比較的短期間に百円を単位とするかなりの基金を保有するまでになった（第一表・第二表）。これは当時の貨幣価値および村の財政規模と比較してみても、決して微細な金額ではなかったことがわかる。明治三十年代と推定される記録<sup>(2)</sup>によれば、当時の寄村戸長役場予算（人件費・用度費・家賃）は半年分で四十二円、寄村小学校予算（人件費・用度費・図書

費）は半年分で百九十三円、そして「教員月給金七円零人 金四円零人 金貳円五拾銭零人 金貳円零人 小使月給金壹円五拾銭零人」と記されている。したがって共有林野は当時の村においては貴重な区有財産になりつつあったのである。しかし一方基金蓄積の方法も、外部へ投資されることはなくもっぱら村内貸付けによって利子累積をくり返したのであった。この基金は庶民金融機関の少なかつた当時においては貴重な資金として村内に貸出されていくが（第一表・第二表および第三章）、このことは反面貸方と借方が同一人であるため、貸金の引きあげが永久にできず、また長びく負債の利子が累積し、その支払いのためにまた負債を増やすという矛盾を積みあげていることを意味する。こうした悪循環が五部落山の放棄を内部から準備していることにもなっていたのではなかろうか。

(1) 戸谷敏之『明治前期における肥料技術の発達』日本常民文化研究所昭和十八年 二三頁。

(2) 「寄村三廻部村会議事規則議案 年代不詳」（川口庄一氏蔵）。

本調査は、神奈川県足柄上郡松田町弥勒寺の飯田弥十郎氏に負うところが大きい。記して謝意を表す。

（本学助教授・地理学）